

人間社会学部

試験問題冊子

(B日程 2月24日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の□内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の1～14、記述式解答欄のA～Jのみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

2025年まで日本企業のデジタルトランスフォーメーション(DX)が進まなければ、12兆円にも及ぶ経済損失が生じる――。これは、2018年に経済産業省が発表した「DXレポート」の内容で、「2025年の崖問題」として日本企業に警鐘¹を鳴らしています。

ここ数年、あらゆる企業で「デジタルトランスフォーメーション」の重要性が高まっています。IT技術の発展に伴うビジネス構造の変化は様々な分野で起こっていて、蒸気機関車、電気エネルギー、コンピュータに次ぐ「データ産業革命」とも、そのインパクトの大きさから「第4次産業革命」とも呼ばれています。経営学者でマーケティングの大家、フィリップ・コトラーは「デジタル化するか、さもなくば死か」という名言も残しています。それくらい、いま起こっている市場環境の変化は激しく、変化を乗り切るためにデジタルトランスフォーメーションが必要不可欠だということです。

しかし、デジタルトランスフォーメーションとはいったい何なのか、そのために具体的に何をすればいいのか、分かっている人は少ないのが現状でしょう。日本における状況を見ると、まだデジタルトランスフォーメーションの本格的な変化の波は訪れていない^アと思います。ただ世界を見渡せばデジタルによる進化はめまぐるしく、日本は世界から学ぶことが重要です。

いくつかの国の例を紹介しましょう。

エストニアは、世界で最も政府の電子化が進んでいる国です。外国人にも電子居住権「e-Residency」を発行し、簡単に「電子国民」になります。電子居住権は日本の戸籍とは異なるものですが、エストニアでは行政のほとんどがデジタル化されているので、電子居住権を持つことで、エストニア国内での起業の手続きが簡易になったり、永久に使えるビザが発行されたりします。

ある日本人ビジネスマンがエストニアを視察で訪れたとき、滞在中、把瑠都凱斗(バルトカイト)というエストニア出身の力士の個人情報²がオンライン上のデータとして見ることができたそうです。その内容はタキに²わたり、所有する不動産などの資産、あらゆる納税額や土地の登記、登録している免許といった個人情報がオープン化され、逆にバルト側からは、日本から来た人が自分のデータを見た履歴が分かる仕組みになっていた³そうです。

このように国民のデータをオープン化することで、例えば強盗が起きたら、その時点で急に所持金が増えている人をすぐにスクリーニングして調査できるので、犯罪ヨクシ³になるという発想です。基本的にはすべての個人情報をオープンにしているのですが、例外があります。生命と結婚に関わるライフイベントはオンラインだけでは完結せず、証明書の発行のために役所を訪れなければならないようです。

次はスウェーデンです。日本ではようやく話題になってきたキャッシュレスですが、スウェーデンではもはやキャッシュレス決済は当たり前で、QRコードすら過去の産物になりつつあります。a、人間の体内に注射で埋め込んだ、とても小さいマイクロチップでデジタル決済を行っているそうです。電車に乗るとき、改札口のゲートで、チップを埋め込んだ手の甲をピッとかざして電車やバスに乗ります。マイクロチップには移動データはもちろんのこと、その人の個人情報まで入っています。レストランやショップでの会計も手をかざすだけという、SFさながらの世界が日常になりつつあるのです。

お隣の中国ではインターネット人口が8億人を超え、その97%がスマートフォンを保有し、都市部に至っては、スマートフォン保有者の98%がモバイル決済を行っているとの調査結果があります。それくらい、キャッシュレス化が進んでいます。実際、中国の都市部で暮らしている私(藤井)も、現金や財布を持ち歩かない生活が当たり前で、その代わりにモバイルバッテリーを持ち歩いています。b。タクシীর配車、食事や医薬品の配達など、全部アプリ上でオーダーから支払いまで完結するシステムが整い、社会基盤として根付いています。

一方で日本はというと、本書を書いている2018年末時点では、各社の決済サービスが乱立し、キャッシュレス決済がなかなか普及しないという状況が起きています。韓国や米国では4割以上の支払いがキャッシュレス決済なのに対し、日本では2割程度にとどまり、いまだに現金決済が主流です。その理由として、各社のサービスや端末、決済方法がバラバラで、利用者もお店も対応しにくい状況になっており、買い手と売り手にとつてのメリットやインセンティブが分かりにくいことが指摘されています。

ある意味、日本的な文化だと思えますが、個別のサービスが「点」で終了して、「線」としてのつながりが弱いため、使い勝手が向上しないことが原因でしょう。もちろん「支払いはすべてSuica」という方も増えてはいると思いますが、他の国と比べてみると、普及の規模は比較になりません。

近年、中国は「デジタル先進国」として注目されています。約14億人の国民が生み出すビッグデータと優秀なIT人材、政府の強力な後押しによって、新たな社会インフラサービスを高スピードで生み出しています。中国で生まれた技術や事業モデルが、今後世界のIT革新の道標になっていくことを見据え、最近では中国視察に行く日系企業が年々増えています。私自身、中国でビジネスをしているので、日系企業を対象に中国視察や研修を行っています。この「第4次産業革命」ともいわれるデジタルトランスフォーメーションを本質的に理解しようとする、1回の視察旅行ではなかなか難しいのが現状です。

例えば、視察に参加した方のコメントとして「中国は中央集権の共産党社会だし、労働賃金が安いからできることですよ」というご指摘があります。誤解を恐れずに言えば、これが視察後の結論となった場合、「この視察は失敗」と思うようにしています。

確かに、中国IT技術のヤクシンには、政治的な背景が寄与していると思えますが、中国で起きているのと同様のデジタルトランスフォーメーションは、米国、スウェーデン、エストニア、インドにも起きています。日本も遅かれ早かれ、この潮流に巻き込まれていくことは避けられないでしょう。

こうした世界の変化において一番重要なことは、「オフラインがなくなる世界の到来」です。今まではデータとして取得できなかった消費者のあらゆる行動が、オンラインデータになって個人のIDとして結びつくのです。例えば、私がコンビニでビールを買うとします。これまでなら企業側は、どの店舗でどの銘柄が何本売れたかまでは把握できても、購買者の世代や性別、ビールの銘柄までは分かりませんでした。キャッシュレス化が普及すれば、購買者の情報と c がひも付けられますから、私がどうい⁵う嗜好で、どの店舗をよく利用するのか、どんな支払い方をするのかまで可視化される時代になるということです。

電車やタクシーに乗るときにモバイル決済を使用すれば、誰がどこからどこまで移動したという履歴がデータとして蓄積されます。また、常時オンライン接続していたり、IoTセンサーが街中に設置されていたりすれば、膨大な行動データが生み出されていきます。「次々とデータが生み出される」という状況が一番重要なポイントで、このようなデータを基にサービスが生み出されると考えるのではなく、社会基盤そのものが再構築され、ビジネスモデルもルールも抜本的に変わっていくと捉える必要があります。つまり、「デジタルによる社会システムのアップデート」が起きるのです。それは、単体事例の先進性を見ているとは分らないことです。

（藤井保文、尾原和啓『アフターデジタル』）

問1 傍線部1、5の漢字のよみをひらがなで、傍線部2、3、4のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 [A] 2 [B] 3 [C] 4 [D] 5 [E]

問2 傍線部ア「日本における状況を見ると、まだデジタルトランスフォーメーションの本格的な変化の波は訪れていない」と筆者が言う根拠として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[1]

- ① 日本の戸籍はエストニアの電子居住権とは異なるものであること
- ② 日本ではキャッシュレス決済が普及せず現金決済が主流であること
- ③ 日本では中国ほどインターネット人口が多くないこと
- ④ 日本ではデジタルトランスフォーメーションは「データ産業革命」と考えられていないこと

問3 空欄 [a] に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[2]

- ① これまでは ② 旧来は ③ 今では ④ 将来は

問4 空欄 [b] に当てはまる文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[3]

- ① 単にキャッシュレス化されただけではありません
- ② モバイルバッテリーだけがあれば十分です
- ③ 年寄りが現金を使うぐらいです
- ④ しかし現金や財布が必要なときもあります

問5 傍線部イ「個別のサービスが「点」で終了して、「線」としてのつながりが弱い」と筆者が言う根拠として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[4]

- ① 各社のサービスがちぐはぐで、利用者もお店も使い勝手が悪いこと
- ② 決済サービスが乱立しており、利用者もお店も対応しにくいこと
- ③ 各社のサービスの独自性が強く、サービス同士の連携がうまくいっていないこと
- ④ 個別のサービスは日本的な文化を背景としたもので他国へ普及していないこと

問6 傍線部ウ「この視察は失敗」と筆者が考える理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

① 中国IT技術の高さは政治的な背景によるものであることが理解されなかったから。

② デジタルトランスフォーメーションは中国特有の現象ではないから。

③ デジタルトランスフォーメーションは「第4次産業革命」だと理解されたから。

④ たった一回の中国視察旅行だけで結論を出されてしまったから。

問7 空欄□cに当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～④の中から一

つ選びなさい。

6

① 企業側 ② 個人のID

③ 世代や性別 ④ 購入履歴

問8 本文の主旨として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

① 膨大な行動データを基に様々な先進的なサービスが生み出される。

② 先進的な単体事例を見ることでデジタルトランスフォーメーションを理解できる。

③ 生み出された膨大なデータにより社会システムの再構築が起きる。

④ オフラインがなくなる世界の到来により購買者の行動がすべて可視化される時代となる。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

脳性まひとして生まれた私は、少しでも健常者と同じように体を動かせるようになるため、ものごころついた頃から毎日濃厚なりハビリを受けていた。私がリハビリを受け始めた一九七〇年代後半は、脳性まひを早期に発見し、一所懸命訓練すれば脳性まひは治ると信じられていた時代だった。また、¹団塊世代の両親は地方で典型的な核家族を営んでいたのだが、父親が外で働き、母親が家の中で家事と育児に専念するという分業がなされていたことが、母親の育児エネルギーをすべてリハビリに注ぐことを可能にしていた。

当時の私と母親は、あまりにも密接につながっているために、つながっていることにすら気づかなかった。母親という他者の肉体であるにもかかわらず、自分の肉体であるかのようにあり、順調に動いている自分の心臓の存在を忘れていたのと同じように、自分から距離を置いて対象化できない。そのくらい、母親が近い存在だったのである。

母親は私の欲求が立ちあがるや否や、すぐに何らかのケアをしてくれていた。そのケアによって、欲求は素早く解消された。もちろんすぐにケアできない場合もあるので、逆に親のケアのタイミングに自分の欲求の発生のタイミングを合わせていたという面もある。いずれにしても、自分の欲求と、それを満たすための親のケア行動というものが、タイミングをそろえてつながっていた。おなかですぐにご飯が出てくる、トイレに行きたければすぐに運んでくれる、というように。私の身体と親の身体は、欲求やそれに伴う運動のレベルで、a一つの体のように深くつながり合っていた状態だったとも言えるだろう。そのような状況では、いま感じている欲求や運動が、ほかならぬ自分のものなのか、それとも母親のものなのかについても曖昧であった。

そんな密室的な母と子の関係のなかで、二つの幻想が膨れあがっていったと思う。ひとつは、「健常者幻想」、もうひとつは「厳しい社会幻想」だ。

「健常者幻想」というのは、「脳性まひはいつか治り、健常者になる」という目標を掲げれば掲げるほど、そこで目指されている健常者というイメージが、人々の平均値というよりはむしろ、パーフェクトな、一部の隙もない超人のイメージにどんどん高まっていく現象に対して、私が名づけた言葉だ。健常者といっても、ひとりひとり体の動かし方を詳細に見ていけば、その人なりの癖があるものだ。誰ひとり、同じような体の動かし方をしているわけではない。だからそもそも、たった一つの「健常者」というものが存在するわけではないのに、密室の中では、あたかもそれが存在するかのように目標を掲げて、そこに²邁進してしまうのだ。

もうひとつの「厳しい社会幻想」は、母と子の密室の外側にある社会や世界というものに対して、「生き抜くのが厳しい場所である」と過剰に恐れる態度が膨れあがっていく現象に対する私の造語だ。その結果、母親が子供のことを囲い込むようになってしまい、「今はまだ早い、健常者になってから外に出なさい」という構えが定着していくことになる。

これら二つの幻想は、生きていく上でもっとも基底的な二つの「信頼」を損なう。「健常者幻想」は、「いまだ至らない、不完全な私の身体」というイメージを突きつけ続け

ること、自己身体についての信頼、つまり自信のようなものを奪い続けるし、「厳しい社会幻想」は、「無理解で無慈悲な恐ろしい世界」というイメージを突きつけ、「なんとかなるさ」という世界への信頼を損なっていく。自己身体と世界への不信は、密室の殻を破って外の世界へとつながっていくための楽観的な構えを奪い、怯えながら密室にとどまらせる力として作用するため、母との分離不安と外界への社会不安はますます高まっていく。身体内部の過剰なつながりが外界とのつながりを阻害するのと同じように、幻想によって過剰につながった密室的な人間関係も、外界とのつながりを阻害するのである。

(中略)

母親と私がつながりすぎていたということに気づいたのは、一八歳のときに母親と離れて一人暮らしを始めた後だった。

私の一人暮らしは当初から何らかのビジョンがあった上で始めたわけではまったくない。b、ひとりアパートの床に寝転がっている状態から、c 始まったのである。そのように寝転がっていると、そのうち徐々に、自分の身体の中にいろいろな欲求が湧き起こってきた。たとえば、「ご飯を食べたい」とか、「トイレに行きたい」とか、「布団の上で寝たい」とか、「シャワーを浴びたい」といった欲求である。

私は一人暮らしをして初めて、自分のなかでd 湧き起こる欲求というものと、e 対峙³したように思う。一般的に体が順調に働いている時というのは、器官や細胞といった多種多様な体の部品が、ある程度の「あそび」を宿しながら、秩序だった反復的・安定的なパターンで互いの動きを絡めあって、つながっている。この時私たちは、部品の存在や部品同士が織りなすつながりの秩序というものの存在にさえ気づかないでいられる。完全なつながりは意識にのぼらない。ということは、人が感受できるのは、反復される秩序から外れた「つながらなさ」だけなのだと言える。

生きていれば、その秩序だったつながりのどこかに、つながりから外れた乱れのようなものが生じる。たとえば血糖値の低下は、身体の秩序に生じた乱れだ。私たちはその乱れを「空腹感」という欲求として感じとる。この乱れは自然に修復されていく場合もあるが、ある段階以上になると、体全体を総動員して外界と「物質・エネルギー・情報」をやりとりしなければ、秩序を取り戻せなくなる。

一人暮らしをする前の私のように、欲求が立ちあがるや否や親が解決してしまうという状態では、自分自身の欲求のもとになる身体内部の乱れやつながらなさ、長時間向き合うことができなかつた。そのため、自分の身体の輪郭や世界の輪郭までもがややふやな状態だった。ところが一人暮らしを始めて自分自身の欲求とじかに向き合うことが増え、静かな部屋の中で、たくさんの欲求が湧きあがってくるのを感じるようになったのである。

その欲求に突き動かされて、私は外界に向かって動き出す。一人暮らしを始めて、最も強く私を突き動かした欲求は、排泄欲求だった。排泄欲求に突き動かされながら、おもむろに、4 ムサクの状態トイレまで這っていく。トイレまでたどり着いて下から便器を見あげる。そして、じっと見てみる。便器に手をかけることで、「けっこう便座は冷たいんだなあ」「けっこう便器ってぐらつくもんなんだなあ」といった情報が入ってくる。

次に立ちあがろうとすると、床が滑りやすくて転ぶ。そういうシコウサクゴ⁵のなかで、「この角度から見たトイレはこんな感じです」「便座のぐらつき具合はこれぐらいです」「床の摩擦はこんなもんです」という、トイレに関するいろんな情報が入ってくる。それと同時に自分の体の情報も入ってくる。いろいろと体の動かし方を試してみるうちに、「案外、この筋肉って動くんだ」「意外とこの筋肉は動かないんだ」といった情報もたくさん入ってくることになる。

つまり、身体内部同士や、世界と自己身体との間に生じた、つながれない「隙間」に直面し、その隙間の中でいろいろと動いてみることで、「欲求」とか「体のイメージ」とか「外界にあるモノのイメージ」といった要素に関する情報がフィードバックとして次々と入ってくるのである。

運動することで世界や身体についての知覚情報を得ていくこのようなプロセスは《知覚・運動ループ》と呼ばれている。かつて一人暮らしをする前までは、隙間を埋めるようにして親が世界と私の間に、まるで半透明のゼリー状の物質のように私を取り囲んで存在していた。私はゼリーの粘性に手足を取られてうまく動けず、世界や自己のイメージも、かなり曖昧で幻想的だったように思う。密室から出た一人暮らしは、ゼリーがなくなり心細かったが、一方で、動きを通して徐々に世界全体の輪郭が明確になっていく心強さももたらしたのだ。

(綾屋紗月 熊谷晋一郎『つながりの作法―同じでもなく違うでもなく』)

問1 傍線部1、2、3の漢字のよみをひらがなで、傍線部4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 F 2 G 3 H 4 I 5 J

問2 空欄 a に当てはまらない語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① いわば ② あたかも ③ しかも ④ まるで

問3 傍線ア「健常者幻想」の内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 脳性まひはいつか治り、健常者になるということ
② 健常者が皆、同じような体の動かし方をしているということ
③ 健常者は完璧であるということ
④ 平均的な同一の健常者像があるということ

問4 傍線部イ「生きていく上でもっとも基底的な二つの「信頼」の内容として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

10

- ① 自分の身体能力への信頼
- ② 母親への信頼
- ③ 物事への楽観的な見通し
- ④ 自信のようなもの

問5 空欄 b、c、d、e に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

11

- ① b ゆるゆると c ひとりで d ほんやりと e まじまじと
- ② b まじまじと c ほんやりと d ひとりで e ゆるゆると
- ③ b ほんやりと c ゆるゆると d ひとりで e まじまじと
- ④ b まじまじと c ひとりで d ほんやりと e ゆるゆると

問6 傍線部ウ「あそび」と同様の意味をあらわす本文中の語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 隙間
- ② 秩序
- ③ 乱れ
- ④ つながり

問7 傍線部エ「《知覚・運動ループ》」について述べている文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① 自分の排泄欲求をしっかりと感じる。
- ② 立ちあがるうとして、転び、床の滑りやすさに気づく。
- ③ 空腹を感じるタイミングで適切に欲求に応じてもらう。
- ④ 脳性まひの人が世界や身体についての知覚情報を得る為の特別なプロセスである。

問8 本文の主旨として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 脳性まひの人にとっても、健常者と同じく、一人暮らしをすることは世界をよく知るために不可欠である。
- ② 親の過保護は子どもの自立を妨げる。
- ③ 自分自身の身体について知るためには、自分の輪郭をしっかりと感じる必要がある。
- ④ 自分や世界を知るためには、逆説的に世界とのつながれなさも必要である。

(以上)

